

「エルリ塾 Part 3」を終えて：君たちはどう生きるか

LRRRI の社会人継続教育支援（今はやりの言葉では“リスキリング”）の一環として3年前に「グランパカズ塾」を開講いたしました。次の年には、「エルリ塾」、今年度は、「エルリ塾 Part 3」を開講し、去る、2月8日に最終プログラムを終了いたしました。

令和5年10月から令和6年2月までの間、熱心に参加された受講者の皆さまに対して、講師の皆さまには入念な準備から、濃密な講義、わかりやすい受験テクニック資料の紹介、そして、丁寧な論述問題の添削など多大なご尽力をいただきました。自画自賛するようで気が引けますが、他に類を見ない充実した講座だったと思っています。特に以下のような特筆すべき成果がありました。

1) 5回にわたる講義の後で論述問題の提出は受講者にとっては大変な負担だったようですが、熱心に取り組まれた受講者ほど、その上達ぶりは目を見張るものがありました。いずれは技術士取得につながると思われる受講者が複数おられました。

2) 講座の最後にオンラインで模擬面接が行われました。おひとりは最近、技術士を取得された方（賛助会員所属企業技術者）へ模擬面接をさせていただき、その後経験談をお話いただきました。もうおひとりには、受講者のうちから資格試験受験予定者として、プレゼンを行っていただいたのちに、質疑応答をさせていただきました。この試みは受講者に大変好評でした。

上記の成果に対して反省すべき点も見つかりました。例えば、講義はオンラインのみでしたので、受講者からのオンサイトでの講義もあった方がよかったとの要望は当然でした。また、論述問題の添削については講師共通のフォーマットを準備すべきだったなどは改善を要する点で今後の計画に活かして参ります。

さて、本講座の当初の謳い文句は、資格取得支援の講座というよりは、講座を通じて、“相互啓発を通じて人間的技術者を目指そう”ということにありました。

常田賢一講師は資格取得の意義は、i) 自己の存在感を高揚させる、ii) 組織のリーダーとして社会貢献に資する、iii) 特別昇給・昇格などの処遇に繋げる、と解説されました。これを踏まえ、受講者に対して“資格取得はスタートであり、有資格技術者は、自己の存在証明（存在意義、存在感）を意識して、絶え間なく、継続教育（CPD取得など）による自己研鑽に努め、住民、市民&国民の付託、信頼に応える責務がある”と説かれました。このことはとりわけ公共事業にかかわる技術者と政策担当者に強く求められることだと思います。

このメッセージに関連して本講座の塾長として、“リーダーシップとマネージメントは違う、管理職が嫌なら、リーダーを目指そう！”というメッセージを追加して送らせていただきました。

ここで、講座を通じて、“人間的技術者を目指そう”という少々歯の浮くような謳い文句にしましたのは理由があります。資格を目指し、高い給与を得て組織のリーダーとなることも大変重要ですが、資格を有する技術者である前に、一人の人間としてどうあるべきかという基本的な考えを身に着けていることがまず大切であると考えからです。蓄積された経験や学びによって得られる①知識や②知恵を「基礎力」としますと、これを踏まえて(i) 与えられた問題を解決する能力と (ii) 新たな問題や課題を提案できる能

力が「技術力」と筆者は定義します。これには異論があることは承知の上で、さらに私見を述べさせていただきますと、「人間力」を有する技術者とは、アビリティ（Ability）とキャパシティ（Capacity）をともに有する人と総括されます。”技術者である前に人間として“と敢えて謳った理由は実はもうひとつあります。

いつものことですが、話は少々飛躍します。皆さまも既にご承知のように、2024 年度アカデミー賞で宮崎駿監督の「君たちはどう生きるか」が長編アニメーション賞を受賞されました。この作品は吉野源三郎による同名の原作（マガジンハウス、2017、同時発売された羽賀翔一著の漫画もあり）を基本としていますが、昨年末に映画を見たときから、原作のメッセージが映画でどのように活かされているのかをずっと考え続けていましたが、「高橋源一郎の飛ぶ教室」（NHKラジオ、2月7日放送）を聞いたあとで、映画をもう一度振り返ってみてやっと気づきがありました。要約すると以下の通りです。

原作の主人公のコペル君（仇名）は、悩みを打ち明けたおじさんから次のようなメッセージを受けます。『世の真理を学ぶためには、自己中心的な考えだけでなく、自分を世の中の構成員の一人としてとらえるような俯瞰的な視点を獲得しなくてはならない。』

これを受けて、コペル君は、叔父さんの教えによって、『自分中心ではなく、世の中の誰かのために、自分で考え、決断して生きて行く』と決心しました。

宮崎駿監督は、主人公のおじさんのこのメッセージを、アニメを通して現在の困難で混とんとした世界で生きていく若い方に送られたものと筆者は理解しました。そして、また、これは、稲盛和夫が「生き方」（サンマーク社、2004）で紹介された“利他の精神”と共通していることにも気づきました。



原作（吉野源三郎著）



漫画（羽賀翔一作画）



映画（宮崎駿監督）

この困難で多難な時代に何を今さらと思われるかもしれませんが、“私はどう生きるのか？”という問いを常に頭に置きながら、絶えず自己研鑽や資格試験に臨むべきことを自戒も込めてお届けします。

“今は無き 田んぼあぜ道 レングソウ

あの時君も 若かった“

（令和6年4月2日 代表理事 安原一哉）